

線香の火

中谷宇吉郎

青空文庫

昔、寺田（寅彦）先生が、よく「線香の火を消さないように」という言葉を使われた。

大学を新しく卒業して、地方の中学校即ち今の高等学校などへ赴任する学生が、先生のところへ暇いとまご乞いに行くと、先生はどういうところへ行っても、研究だけは続けなさいと諭さとされた。「地方の学校へ行くと、研究の設備などは、もちろん少いだろう。研究費だってほとんどないだろうが、その気さえあれば、研究は出来るものですよ。設備や金がなくても出来る研究というものも、ありますよ。一番いけないのは、研究を中絶することなんだ。何でもいいからとにかく手を着けて、研究を続けることが大切です。一度線香の火を消したら駄目ですよ」

特別に優れた人たちのことは別として、普通の意味での秀才でかつ真面目まじめな学生だった人が、いつの間にか、学問の世界から離れて行ってしまう場合がよくある。ところが大学時代は平凡な学生で、卒業後も十年くらいはほとんど噂うわさに上らなかつた人が、案外にいい研究者として、次第に学界の表面に出て来るような場合もある。

そういう場合に、その原因とか、理由とかいうものを考えても、結論は出るはずがない。一々の場合について、条件は皆ちがうからである。運ももちろんあろうし、本人の本当の

能力が、時とともに現われて来る場合もある。しかし千差万別の条件の差を超越して、普遍的に言えることが少くも一つはあるように思われる。それは、研究者として成熟した人は、線香の火を消さなかつた人である。

科学、たとえば物理学のような学問をやつても、皆が研究者になる必要はない。しかし科学をやつた以上は、やはり研究者となるのが本筋であつて、他の方面はいわば傍系である。もちろん教育は非常に大切であり、また科学行政のような仕事も、国家的見地から見れば、区々たる研究などよりも、もつと重要である。しかしそれにもかかわらず、本筋は何かと聞かれれば、やはり科学者の任務は研究にある。ということは、現在ばかりでなく、将来を含めても、言い得ることのように思われる。

そういう意味で、寺田先生の「線香の火を消してはいけない」という言葉には、重要な意味があるような気がする。この頃になつて、三十年も昔に言われた先生の言葉を、しみじみと思い出しているのには、わけがある。

先年、二年あまりアメリカの研究所で仕事をして見て、日本と較べてあまりにも研究能率の差があるのに、一驚を喫した。日本だったら、二十年かかる仕事で、アメリカでは二年で出来るのである。現在の日本の研究費および施設は、世界での「地方の高等学校」で

ある。それなればこそ、われわれは線香の火を消してはならないのである。

（昭和三十年十月二十二日）

青空文庫情報

底本：「中谷宇吉郎随筆集」岩波文庫、岩波書店

1988（昭和63）年9月16日第1刷発行

2011（平成23）年1月6日第26刷発行

底本の親本：「百日物語」文藝春秋新社

1956（昭和31）年

初出：「西日本新聞」

1955（昭和30）年10月22日

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

線香の火

中谷宇吉郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>